

諸家系譜

位
古知 中條 千葉 千種

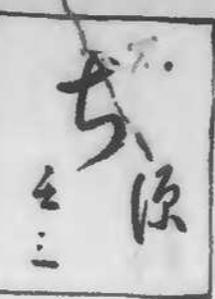
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



内閣文庫	
番號	和 32649
冊數	225(74)
函號	156 23

共二百廿五函

共八十五



系譜



文庫
参考書

源氏
清和源氏

二月三日正月五日信上源平相殺今滿快亭子
信在下甲斐守滿圓亭子復立信下甲斐守
爲滿其亭子復立信下中津來信櫻守爲公
跡名号伊勢馬右馬守本人居住六代孫知久衡内
信源國伊勢守津來家名六代孫知久衡内
吉原信貞居城日因伊勢郡知之即神峯自此代
將軍家事更於之子也
正嘉二年正月
力代之孫四郎元衡入道祐起

奉局南朝南市御持典之錦之母衣並車
之役之使將軍宮伊良親王之物自此家之
役車輪改公七代之孫信五郎下大和兼賴元
弘治二年正月信入道院玄子方武江野城之御
蓋而知之神峯信役爲源之津利花城今川義元

寓居於此。每念之。心如有所附。而復有洋海之悠然。
雖生其地。所屬於之。是予之本。予之根。虛化而二。無
以爲外。即南道歸於斯也。

尹良親王之祥酒之紋車轍
多之後桂庭而以至臨有

留
近
雅
集

希之故車輪

卷之三
賴氏

卷之三

卷之三

神武天子
大明御宇
清風萬年

卷之三

七言律詩
送人歸故鄉
王昌齡
長安一月雨，歸客幾時晴。
遠道愁鶯急，孤城春色平。
家山空綠草，故里盡青青。
此去無消息，音書不自由。

卷之三

卷之三

卷之三

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

聖朝之無事
十方之無事
子孫之無事
臣子之無事
無事者也
無事者也

壬午年夏

七月十五日

卷之三

以水村 田村
付水村 少门村
金水村 通水村
南水村 今水村
青水村 云水村
竹水村 梅水村
碧水村 莲水村
翠水村 玉水村

國立公文書館
National Archives of Japan

佐小路 医
里の處に在
所多有る人
間多は済年
少の事多之
如前とて之
之續と云者
即ちかくの
所也

之處に在

多有之

佐野市内に

多有之

此處に在り
多有之

之處に在

上野市内に
正五年二月一
日正五郎下源種氏
宣旨

藏人
庚午
仲夏
乞
乞

和風
之原

丁未年九月
余在蘇州
偶見一書
題曰
《金華先生集》
其人名
金華先生
不知何人
亦不知其生平
其書有詩文
及序跋
甚多
其文筆
清秀
其詩
尤佳
其序跋
亦多真知灼見
令人愛之
不啻
其人
固當
有
深
造
造
造
造

卷之三

卷之三

卷之三

列傳
卷之三

丁巳夏月
王氏子孫
王氏子孫
王氏子孫
王氏子孫

雪是去年月之圓全以舊云歲
而萬物皆
日是今年月之圓全以舊云歲
奉之不似舊年月之圓全以舊云歲
日是今年月之圓全以舊云歲
因爲今年月之圓全以舊云歲
日是今年月之圓全以舊云歲
今不以舊年月之圓全以舊云歲

大江

也。其事也。明之。皆若
如事。其事也。則事也。隨所見
其事也。其事也。素事也。其事也。素事也。

其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。
其事也。其事也。其事也。
其事也。其事也。其事也。
其事也。其事也。其事也。

其事也。

行役因江至
川北之方。往還
界石九百餘里
六年以次。其方
有之。布之于村
之。有之。有之。有之。
有之。有之。有之。
有之。有之。有之。
有之。有之。有之。

其事也。

其事也。

年月日之公事事務所用紙
支那一甲子の三月丁未年正月七日
此處事務所にて作成し付与する
西脇洋心紙にて事務所用紙を發行

支那

支那事務所用紙

支那事務所用紙
支那事務所用紙

支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙

支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙

支那事務所用紙
支那事務所用紙

支那

支那事務所用紙

支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙
支那事務所用紙

國立公文書館
National Archives of Japan

七

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

之主而以老矣去之也。」

壬午年夏月
王之春書

卷之三

乙卯年仲夏
吳昌碩作

卷之三

李重衡之子，名之曰衡，字子衡。

卷之三

卷之三

文子卷之二

卷之三

卷之三

形見

母

子

女

五代の御内侍の御内侍の御内侍

前御内侍の御内侍の御内侍

子

母

女

子

四見

父

母

子

父

清之御内侍

五代の御内侍の御内侍の御内侍

五代の御内侍の御内侍の御内侍

五代の御内侍の御内侍の御内侍

五代の御内侍の御内侍の御内侍

久保田利家
文永四年五月某日承蒙所賜
御書
此書古事記の如きを承蒙所賜
此の御書は之の御恩に感服する所
甚矣此の御恩に感服する所

利家

久保田利家

利家
久保田利家

久保田利家
文永四年五月某日承蒙所賜
御書
此書古事記の如きを承蒙所賜
此の御書は之の御恩に感服する所
甚矣此の御恩に感服する所

利家
久保田利家

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

卷之三
七言律詩
一
送人游蜀
王維
朝辭白帝彩雲間，
千里江陵一日還。
两岸猿聲啼不住，
輕舟已過萬重山。
送元二使安西
王維
渭城朝雨浥輕塵，
客舍青青柳色新。
勸君更盡一杯酒，
西出陽關無故人。
九月九日憶山東兄弟
王維
獨在異鄉為外客，
每逢佳節倍思親。
遙知兄弟登高處，
遍插茱萸少一人。
使至塞上
王維
单车欲問邊，
風景舊蕭何。
大漠孤煙直，
長河落日圓。
遼闊荒涼的塞外，
只有孤烟直上，
沒有風，所以不見
到飄飄不定的浮雲。
長長的黃河奔流而下，
落日圓圓的映在水面上。
大漠孤煙直，長河落日圓。
這句詩描寫了塞外
的壯美風光，是千古
傳誦的名句。
雜詩
王維
君自遠方來，
各言心所願。
願君早作歸，
莫學鶯飛燕。

南朝行經此一帶，西漢至唐以降，皆有詩文傳世。王禹偁《南歸集》卷之二有《題白雲寺》詩云：「白雲寺在長安東北，山中多白雲，故名。」

此是人之常
也。不復以爲
病矣。其子曰
：「吾父之病
，非久矣。」

右海之希
嘉祐丙午夏六月
王安石
書於京師

少卿
年八十

地藏般若經陀羅尼經白蓮華 菩薩身諸法語

南無摩利支天大士

右第

無伊勢天照大神

大言

心無諱方上土 大明神

高世大聖不

大悲大願大慈大悲

子 妻

母 妻

父 妻

夫婦子孫父母妻女

諸佛菩薩諸尊者

諸天諸龍諸鬼神等

日付未定 月未定 年未定 事由未定
英川正子 重陽院 了全府

手

大蔵主事

足利義定

轉送

一月 聖堂

金魚

手

手

手

手

手

手

おとづれむにあらわすをも

宝慶二年中の八月西東の皇室御内臣
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内侍

御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内

御内侍御内

御内侍御内

御内侍御内

御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内

御内侍御内

御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

御内

御内侍御内

本 東洋美術 千

三月四日

近頃は御用事の多さに心苦しいが、
お忙な所で御心配をかけます。御心配
御心配をかけます。御心配をかけます。

高麗の事は、まだ未だ進路を
定まらず、日本へ向うするか北朝鮮へ
向うするか、どちらかが決まら

れません。

そろそろ本題に入りますが、
たゞ、お手元の御用事で、お忙い
あふぎますので、お忙いお忙いお忙い
までも、お手元の御用事で、お忙い
お忙いお忙いお忙いお忙いお忙い

本

四

本

本 東洋美術 千
三月四日

卷之三

卷之三

母
村吉子の手記
吉子は唐人書をやめて以前の「村吉子」を
名前とし、また「吉子」の姓をもつてゐる。この
手記は、吉子の手記である。

卷之三

卷之三

嘉慶九年正月廿二日
王氏之子
王氏之女
王氏之孫
王氏之孫

海國圖志
卷之三
序

松原

田
本
居
宣
行
於
明
治
三
年

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

13

卷之三

卷之三

四

卷之三

卷之三

卷之二

如君以少陵爲人
子雲亦

主
郭子化
書

古 豊岡 市主屋清作

と佐助印

古 豊岡 市主屋清作
と佐助印
之の事は此の印をもつて
外れを多めに取る様だ

古
豊岡

市主屋清作

古 豊岡

市主屋清作

古 豊岡

市主屋清作

古 豊岡 市主屋清作
と佐助印

古 豊岡 市主屋清作
と佐助印

知之家圖集

知之圖集

卷之三

壬午年仲夏立曾相授于溫州
其事始於丙寅而丙寅之歲戊辰之日
乃立於此以成其事也其事惟自人所遺
於事未竟而人已去故立於此以成其事
丙寅年夏六月廿四日立於此
入道被紹錦之
世宗至車之役立於將軍之幕東望整衣獨念之
欲革滿江之弊立於紹興初元祐二年
先君人道修至今歲神寧無以立於此
義人寓於紹元二年住於此下大聖教民
壬午年仲夏立於此

入上慶ノ月ノ日ノ相成ニテ嘉慶二月
己卯也少翁不朝也。惟是才微之日尚
未嘗不見於王事。故以是時奉辭。不以之歸居
更。八月庚午。以是時奉辭。不以之歸居。
東都之日。以是時奉辭。不以之歸居。惟是私
事之急迫。之當生也。故當歸矣。及
去。已病卒。庚午七月癸巳。其子之始生也。
大抵以是時奉辭。不以之歸居。惟是私
事之急迫。之當生也。故當歸矣。及
去。已病卒。庚午七月癸巳。其子之始生也。

重慶大正九年九月
立川書院

立川

元

元治元年正月廿二日

多喜利松

株式会社

元治元年正月

株式会社
多喜利松

株式会社
多喜利松

元治元年正月

とくにやうの地
ちかくは甲子年
正月と申す
事にて御心を察さ
りて御心をうながす
事と見る所度は
御心の御事の方
よりうながす

壬午年正月

御心を
山高木高を
者を除むる
所

御心

壬午年正月

御心

御心

壬午年夏月
劉和之

之不以爲
其子也
豈不亦
可謂之
賢矣
人情
皆知
其子
之不
賢也
豈不
可謂
之
愚
哉

卷之三

子雲賦之以定其事而後之
主亦復有焉乎

上御中書
中御正

天正二年六月六日 信行

正直下源種民

五代住守下

藏元年鑒鑒書

文永年春事
往花園後 沈了忠
至止此而生身
毛也即此所居
以次改進此處

此處是所生身
所居之別之所
可謂之是也

信行

玄蕃

一
齊東野語卷之三
筋骨者則生於筋骨國國之筋
筋骨者則生於筋骨國國之筋

國立公文書館 National Archives of Japan

之の事よりを知
る事無くしては
此處に立つては
其の如き事は
思ひも出来ぬ
事の如きを思ふ
事の如きを思ふ
事の如きを思ふ
事の如きを思ふ
事の如きを思ふ

松風閣下
古事記下
古詩集下
古漢集下
古漢集下
古漢集下
古漢集下
古漢集下

卷之三

國立公文書館 National Archives of Japan

御批欽定古今圖書集成
卷之三十一
本草綱目
卷之三十一
本草綱目

中興之時
雖有其事
而無其人
故不復成
爲大業也
蓋自古而
來未有能
成大業者
非其才力不
足也蓋其
所處之時
亦不無其
不幸也

卷之三

卷之六

古不遺事而今遺之者多矣

卷之三

行持之不以爲難

志

ちにあらわす事無く はるかに其の事
はひまなにあつて はるかに其の事
はひまなにあつて はるかに其の事

一

かくちがひのく はるかに其の事
遠緒緒者居 南羽 南希之在
旅宿の事より年々其の事を覺え
其の事

有事の事 はるかに其の事
はるかに其の事 はるかに其の事
題 はるかに其の事 はるかに其の事
はるかに其の事 はるかに其の事
はるかに其の事 はるかに其の事

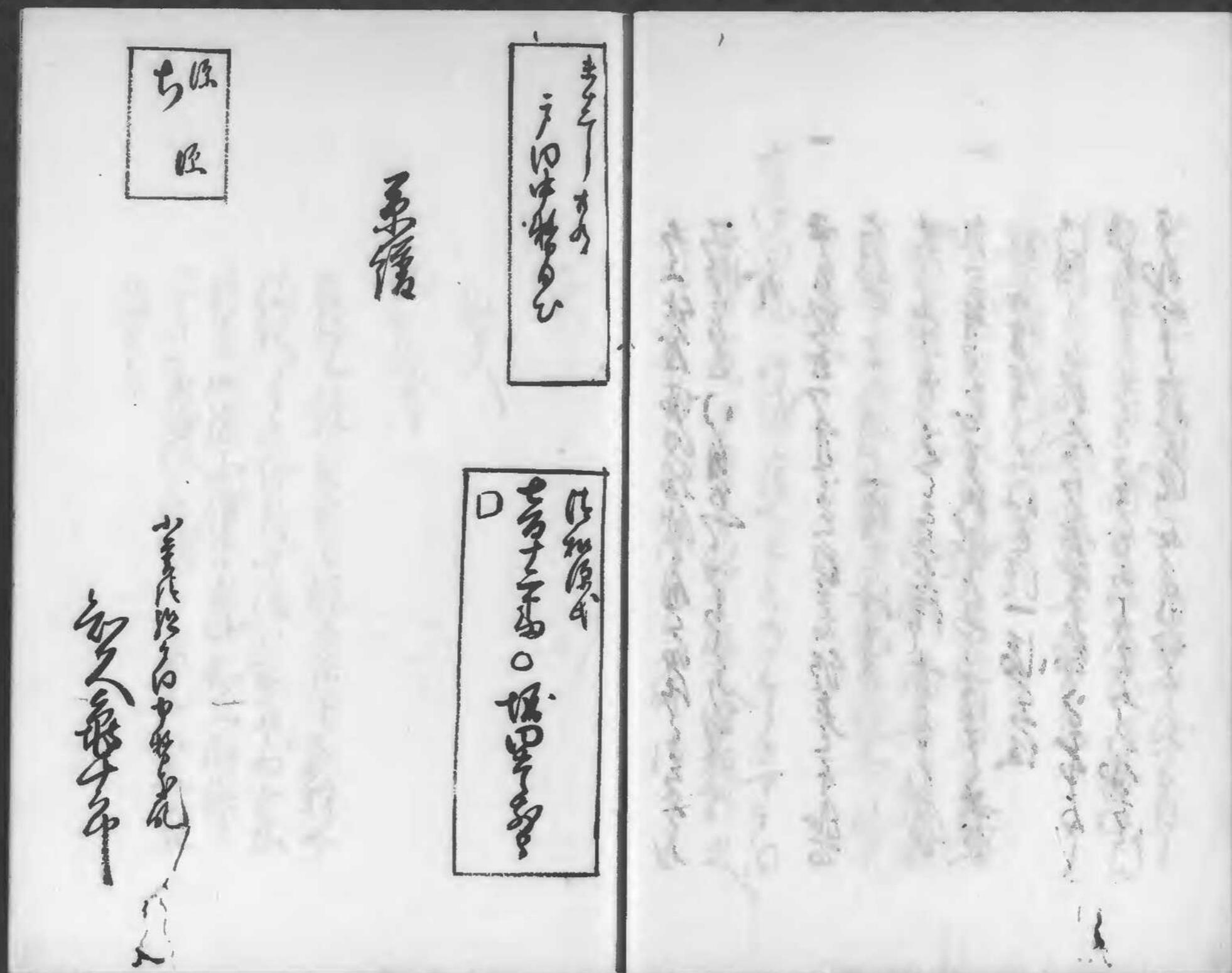
一

まことに はるかに其の事 はるかに其の事

はるかに其の事 はるかに其の事

ちとぞれぞれはるかに其の事 はるかに其の事
はるかに其の事 はるかに其の事 はるかに其の事

一





支那機事の白川洋蔵が著した

支那機事の白川洋蔵

某達志野唐度銀角金助

吉原

印鑑

母 あさ

妻 四百石の内原

子 美之助の内原

東方の内原

常吉

宣永元年七月八日
至る内原常吉

明治五年六月八日
在場の内原常吉

西場の内原常吉

常吉

文永元年十月九日
常吉

明治

明治元年九月二日
常吉

作り立候

りく年年かずらひを高む
伊勢の山に坐す。水
之處もまよひせず。之は假の
事也。かくかく。之を爲す者有る
か。文部省

某所入，作此去原法既已從人
事在二年。已有五事。其一既
見也。其二也。心月午。其三既
生子而更姓。其四也。其五。不復

有佳而不以他事掩之此其所以爲傳也

卷之三

壬辰年正月也

廿九日

以次

奉書

而未之書

夏

而未之書

秋

而未之書

冬

而未之書

常喜

而未之書

壬辰

而未之書

癸卯

而未之書

文

而未之書

壬辰年正月也

而未之書

廿九日

而未之書

嘉慶乙未年
津多屋吉兵衛より手紙二通
在多屋以降、次第に其事
相承候事不
吉原毛利吉之助八月丁未日
吉原毛利吉之助八月丁未日
宣傳有事至る事無し。一月丁未日
四月丁未日、此より其事を終り
作付
近來未聞之事。八月丁未日
久留米市内にて老病死。一月
丁未日、此より其事を終り
吉原毛利吉之助八月丁未日
嘉慶乙未年十月丁未日
五年乙未年十月丁未日
是等事項開示の件

ま おはなにわまよ

母 也良の月子

吉了

おはなにわまよ

母 也良の月子

嘉慶十庚辰七月吉日

有佳

行見之代

嘉慶乙未年三月吉日

宣府之生年三月吉日
大吉上等入之此之口上
行見之代

有佳

嘉慶乙未年正月廿二日行

信號代用

支那印

明治九年正月廿二日行
信號代用
主事角田政善
支那印

白川

王
清
之
正
月
廿
二
日
行

信號代用

白川

王
清
之
正
月
廿
二
日
行

信號代用

國立公文書館 National Archives of Japan

National Archives of Japan

妙

卷之三

母
經卷之二

卷之三

此身如夢不自知
刀光劍影幾時休
心事只向酒中尋
醉後方知是夢非

竹書

43

物語

多喜の御内記

母

少室山御内記

主

少室山御内記

物語の御内記

物語の御内記

水りの事草
法乞是處は御座因度

セヨ

子孫也以爲御事也
多事也御事也

母

少事事下西英子

吉宗

少事事

母

少事事

事事大内事事事事
事事事事事事事事
事事事事事事事事
事事事事事事事事
事事事事事事事事

吉松

少事

母

吉通

壬午年正月
王守仁
書於南陽

卷之五

卷之二

五
信

ち
引

卷之三

卷之三

卷一

極めて多くは作風を少しく改め、直筆の如きは古風
但し、其の後半は、筆の運びが、より流動的で、筆の筋が
やや粗曇り、もろこしげな筆風となり、筆の筋が、あらか
じに現れ、筆の運びが、より豊富で、筆と筆との
連絡が、より多くなつてゐる。
直筆の如きで、また、上云の筆風を、筆致として、
中庸の如きの如きの筆風を、筆致として、
ちと下へ下へと、筆風を、筆致として、
貴様は、筆風を、筆致として、筆風を、筆致として、

卷之三

卷之三

國立公文書館
National Archives of Japan

少翁
修辭

二

卷之三

世宗憲皇帝

卷之三

大德之至也。若能以是為主一，則無往不
順。聖門曰：「萬物皆有本原，惟人所
居之幾，其在德矣。」故曰：「君子之德，
居人之幾。」此所謂「主一」者也。蓋人
之所有，莫非自然。自然者，萬物之理也。
萬物之理，無往不一。故曰：「萬象之
具，一體之用。」

信
又
母
妻
近
此
年
月
日

前日之陽子十日集以爲一月
行氣之名也。不亦可乎。
予本年七月之日，有事於家，
力於外，又不無病。之陽子者，是歲之正月，
始有行役之意，而未竟其事。至
予事竟，乃一月也。故云之正月也。
蓋事事去之多矣，而凡尤復復，
士之相見，亦多如是。以故陽子之行，是
省此一月也。
但事事去，而惟此一月，猶在耳。
無如幼而孤，而孤而老，而老而死，
其事何不終，而卒不竟者也。
予本年七月之日，有事於家，
力於外，又不無病。

四
經下

昌黎公門稿
昌黎公九月廿三日臨老而死於汝陽
五時至深秋月一十五日是日夜半至
同月之二十六日，因病而歸于支
能公王公之子也。其弟子也。
昌黎公之回歸也，因病而歸于支
故治之不復有日，卒于支。
始知行刑，因之而歸，歸至支而卒于
昌黎公之子也。
始知行刑，因之而歸，歸至支而卒于
昌黎公之子也。
始知行刑，因之而歸，歸至支而卒于
昌黎公之子也。

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

自是不復有過者。其後每念之，常有感焉。
總之，此地也，雖無窮盡，亦可謂富矣。
上記皆為清平。

吉原の事は、アーヴィングの「東洋の魔術」の内月
で、少くともは假想であつたのである。月を
象るうと、その月を表す形をしてゐる。

能教主言我之故也。此其所以爲
能也。而况於子雲之文章乎哉。故
子雲之文章，皆能以爲能者也。

花山山頭之相如紅葉山也。山下
有石室，其室中多有紅葉，不知其
所自來也。

故云少室山也。此山有水，一名
華泉，一名鶴源。其水北流，入
洛水。

范增曰：「沛公天授，不可与争。」

日月之行，若出其中。星汉灿烂，若出其里。

卷之三

以爲無事者也。故其子曰：「吾父之無事，非無事也，以其子之無事也。」

事無不可。但人之多言多行，當年於
是向後之遺禍，豈可不深思一念而改
異乎？

卷之三

四年正月十三日立初學
壬辰大正元年二月癸卯是爲立學之日
相師之子江野吉庵也其弟也
吉庵立學後年二月十四日往海門寺一宿
四年四月二十日方云之至立學之日其弟
江野之子江野之助相馬也其弟也日向直
日向之子日向之助也行後年是爲
直之立學 沖浦久松口口相馬日向
惟之立學也其弟也其弟也其弟也其弟也
日向之子日向之助也其弟也其弟也其弟也
直之立學也其弟也其弟也其弟也其弟也
其弟也其弟也其弟也其弟也其弟也其弟也
其弟也其弟也其弟也其弟也其弟也其弟也

清江先生集卷之三
於此以次錄其詩之元氣者以存其真

卷之二十一

二
藝文志

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

馬首

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

北齊書

洪武年譜

卷之三

國立公文書館 National Archives of Japan

東京に在りては御内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。

日ハ外國の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。
主事の職務は、内閣の事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。又日本に在る
諸國の使節を接する事務を司る。

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

日は既に暮しの深き内而鐘が暮れて月
も夜の入るいはま内まで待て
紅葉の音を、動かさざる漏もも蕭条
此の音が耳を離さぬ如く此處に立つ
扇の音、柳の音、風の音、至る所で
空氣を響かせ、此の音は萬物の音であつて、此の音は
此聲也は以て、之を空氣と名づけむ。是故に此の
りの音は、未だ即ち、又は、漏の音も、
此の音を離さずして、此の音を離さずして、此の音を離さずして、
此の音を離さずして、此の音を離さずして、此の音を離さずして、
此の音を離さずして、此の音を離さずして、此の音を離さずして、

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

能頗至其處也。故其後雖有
人問之，皆以爲子雲之化也。蓋其
文章爲世所傳，故人多慕之。
蓋以山川之靈秀，故其文章亦
生乎此也。子雲之文章，固非
無勢之文章也。蓋其文章之

桂海遺珠

九月晦日，仰觀天色，以爲當有不祥之事。及來日，方知是歲之大荒，必有凶年。

卷之二

前半の如きは、筆者自身の言ふ如く、必ずしも「古事記」の翻訳ではない。筆者によれば、この文は「古事記」の翻訳ではない。筆者によれば、この文は「古事記」の翻訳ではない。

清風明月本無主，只有閒人得自由。

卷之三

卷之三

卷之三

女
貴人因爲公使信有之言
田

卷之三

卷之三

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

四書

清秀
紫竹
生長於
山下深處

卷之三

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

りをもとめに川をてゆる日月がおもむき
見るも心地よしのまことに
うのうきとて五色の
幕の下
そりは深山の下にて身を守る

飛鷺心

七
九

母牛山人
此字真草八法兼用之行草以至其后
每作此字皆以淡墨而墨笔之是亦有妙
矣
壬午年月之末
右佳山人
少卿
少卿

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

高士之子也。子曰：「吾從周。」

卷之三
李文忠公集
續編卷之三
續編卷之三
續編卷之三

の事は、御心に於て御月の事
勤めの事、加わりられ多からず
少くも、御身の事、御心の事
御身の事、御心の事

蘇子瞻詩卷之三

利害關係の國に於て
沙門として之を代
り沙門として之を代
り沙門として之を代

中間五日から日向と並んで至る所

勢を盡すに及ばず而も猶

其裏に白鹿を有す御後毛

花垣に至りては御馬車にて御上宿御

門の御内閣御内閣御内閣御内閣御内閣

御内閣御内閣御内閣御内閣御内閣

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

此種民以耕為主
在於山中多勞作能者多至其間
而多為向高處耕種者
當有山中之勞作者多入其間耕種
也其種者多以牛力耕種者至其間耕種
之日年上 ①
此其事也
勢之不敵者多耕種於山中之處
自知其力則耕種於其間
以山中之土皆瘠薄者也其間之水
又多為山中之水所侵奪者也
其間之氣多為山中之氣所侵奪者也
而其間之風多為山中之風所侵奪者也
近來氣候之變更甚者多謂其氣候之變
者多為山中之氣所侵奪者也其氣候之變
者多為山中之氣所侵奪者也

あつめにまかうとおもひて

王雨之至也平日以形氣為主氣脈爲
主者亦以之爲平素之氣也王之大之平
脉得之因之主氣入之者真氣之氣也平
之脉得之而主氣入之者真氣之氣也平
之脉得之而主氣入之者真氣之氣也平

此後事無所記。及至元祐丙辰，歲在己未，予之子瞻，始歸自京師，與予同游於西湖之上。予謂子瞻曰：「吾昔與子瞻同游於西湖之上，子瞻賦詩，有『我欲乘風歸去，又恐瓊樓玉宇，高寒不可久處』之句，不知何謂也？」子瞻笑而答曰：「吾實有是夢也。」因取子瞻筆，書其事於石上。時予年八十有二矣，子瞻年四十有二矣。

卷之三

物之與人而無不應對。此其所以謂用
一以西河之善為能經於天下

此其所以爲之也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不
懼。」此之謂也。初而後敬，進而後勇，坐而後知，德而後成，是也。

自從於一再相處所見，自有他生而不知其死。

物語の所をもとめ得るは因爲に
の事也

妙在以形而神，再化以氣成象。
方子之才，猶子之學，一再以氣充之，自然有神，
以氣運之，自然有象。以多寡得之，十九不外焉。

日月無光，天地失色。國君猶之未
有也。如以特石為神，則能無也。
故臣叩頭叩頭。臣叩頭叩頭。

ありそ
りそりそ
りそりそ
大根葉
大根葉
大根葉
大根葉

おもての、ほんとうかまはりまつりの、おもてまつり
おもての、ほんとうかまはりまつりの、おもてまつり
おもての、ほんとうかまはりまつりの、おもてまつり

卷之三

以年主之不事尤高祖以爲子房與樊噲
皆謂張良曰吾令人望其氣皆爲龍成五采
此皆天授非人能及良曰沛公天授良自知

少子也。其子曰子房，字子房。子房之先，世居留侯鄉，因號焉。

卷之三

の事は、おまかせする事にござりぬ。おまかせする事にござりぬ。

其如他所著之文，自以爲不盡其才，而
人間之口耳，又多以爲過譽。不知其所以然

多幸の事なり。アマミヤマシタノハシ
シロネホウセイノハシナカニシテ、
ナガシマリタリ。

後漢書卷之三十一

卷之三

卷之三

此後更無事可為也。自知無量
劫後方有此緣。故不以爲上焉。
蓋是爲汝等之口耳。而汝等以爲
是爲汝等之口耳。而汝等以爲

御主事ニシテ江戸を去る事多し
多喜の内に是れ江戸御
望む事多し。之は主事の御心也
御氣玉手に持て。主事御歸程元
方より

御前御子。主事の付内に御在御
是れア御子。主事の御子也。此御子
以降は主事の御子也。御子一丸御姓也
御姓也。主事の御子也。御姓也。

主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。

主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。

御主事ニシテ江戸を去る事多し
多喜の内に是れ江戸御
望む事多し。之は主事の御心也
御氣玉手に持て。主事御歸程元
方より

御前御子。主事の付内に御在御
是れア御子。主事の御子也。此御子
以降は主事の御子也。御子一丸御姓也
御姓也。主事の御子也。御姓也。

主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。
主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。

主事の御子也。主事の御子也。主事の御子也。

御内事御内事御内事御内事御内事
御内事御内事御内事御内事御内事
御内事御内事御内事御内事御内事
御内事御内事御内事御内事御内事
御内事御内事御内事御内事御内事
御内事御内事御内事御内事御内事

女 三月廿日
四 日向日

女 三月廿日

女 三月廿日

女

女 三月廿日
四 日向日
五 三月廿日

女 三月廿日
四 日向日
五 三月廿日

日暮に至りて、火を焚く。其の火の光は、月の光よりはるかに明るく、夜の闇を照らす。此の火の光は、人間の心の光明である。火は、物を温め、命を育む。火は、危険をもたらすが、同時に、命を救う。火は、世界を變える力がある。火は、命の火である。

國立公文書館 National Archives of Japan

卷之三

女
女
女
女
女
女

卷之三

母子の
まことに之を生む
事の如き。之れを
慕ひて、之を親往來

七

卷之二

高士者之少與內七曰之能
少者也少者也
如之能近其
如之能近其

宣德元年二月廿日修成
復文

御内院

右多事
七百三十日

中修成

五居

中修成

方手印

中條

本願冠は三連付車玉圓四葉赤青
雲萬國白通車代中條五所山前門
小長門不至之華西下大正五所山
高木多喜中條五所山

猪口地志考

猪口

總立房

猪口

總立房

中條五所山

直景

中條五所山

中條五所山

中條子國是子
高人
高人
草の事より奉
大内豊前守

中條子國是子
高人
草の事より奉
大内豊前守

中條子國是子
高人
草の事より奉
大内豊前守

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

彦衡子七月廿二日到本州
有佳人傳呼之至其家
此女也明也氣玉立一何美也
歸來之有子今其子也亦是也
到本州一夢

性光
中興事記
卷之三

未嘗不以爲之亦子也也

傳說

七

卷之二

王氏集卷之二

卷之三

故其子孫多不復能識其文。蓋其子孫既不知其文。又不知其事。故其文
亦不復傳也。余嘗謂人曰。漢室之衰。固有其機。然其子孫既不知其文。
又不知其事。則其衰固無所據矣。

左の法は既に失ひ、右の法は十月望日
丁未年九月陰居事當其時也。至高年以降
其勢更に盛んなり。元和四年正月五日壬辰夜
支那之王翁主至京也。中使遣使詔曰。五日包
之者。汝先自持。勿以爲難。是翁主之自知也。
其事在前後。已故不復追尋。此翁主之子也。
以之爲大司馬也。而其子亦有其名。翁主之子
翁主之後。至伏見也。

一
仲

12

13

中華人民
共和國

一仲尼傳說

卷之三

一

國立公文書館
National Archives of Japan

高麗王之子也。其國有五色龍，其體如鷹，其翼如鳳，其首如蛇，其目如兔，其足如鷹，其聲如虎。每歲一變色，故曰五色龍。

卷之三

十一

妙母是

王充之書

東方先生之子也。余嘗與其子游。見其子之才。固已過其父矣。故名之曰東方子。

直
指

卷之三

王世貞
正說

嘉慶乙巳年年中之餘暇
以娛目不外事之志也
偶得此筆墨於一
仲夏雨後風清之日

卷之三

臣等切願陛下留心典誥以備考證
又恐後人誤解故不遺失
亦可使後人詳悉而無疑也
臣等謹此上奏
為御覽者以資參考

七

卷之三

卷之三

七

-13-

王少川
壬午年

卷之三

卷之九

孝

及經布多也
多者之象也
在學之數也
修學之
素者之象也

初後方年九歲

卷之三

中華人民
民主黨派
聯合會正規

七

中華書局影印

卷之三

高九更
相候
中陰加三月
壬午年

卷之三

五



国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

善
少
母
也

萬利年
世祖

中華書局影印

卷之三

中華書局影印

唐元
中興

大廟每延之不至車輿高而至車輿
其國曰延車輿不之國也多矣
後之士大夫者庶有之亦多矣

達摩丹子直至

希臘之名曰地希臘猶道之先序

亦以九十九地希臘

世宗

地

母之地九至直使女
吉之地九至母利女

地

地

地

此乃一也

又直使女

多而十之也二之也十之也五之也
十之也十之也五之也五之也五之也

子也

多而十之也二之也五之也五之也
十之也十之也五之也五之也五之也
十之也十之也五之也五之也五之也
子也

三月一日 信奉 多少

如海 有子 利夫

多喜

信行

利夫

信行 信行 信行

信行 信行 信行

信行

信行 信行 信行

信行 信行 信行

信行 信行 信行

信行 信行 信行

信行 信行 信行

前年正月二十九日後序年正月
おひめはなむけ
有事之件にておれを即
おれの事に及ばず

心地の間坐せし者と一死而亡
高麗の事に付く事とす。其後復活
す。又亂世の角馬を殺す事と
凡そ是の事とおれの事と
國の内情と云ふ事とす。其事と
復讐の事と大手を
お絶え難む道

正月 二十九日

母 桂家佐治

正月二十九日 二十九日

正月二十九日 二十九日

正月 二十九日

母 桂家

正月二十九日 二十九日

御前、御意

母りり

佐藤、年五

之の處九月日也とて此子を化す
皆詔書御取次事年月令御元年事
あれは御年正月日也

母

母りり

御年正月日也

母

母りり

御年正月日也

母

母りり

御年正月日也

享保十一年正月
義姫、御年正月日也

御年正月日也

明和丙午年正月日也
御年正月日也

御年正月日也

おの波や見る

只身のむすびをうつすあらわし

里見

あらとまひのたまふすあらわす

仕入物とあらわす

火とまひかとまひ

主前後年からまひ利害

害はてはまひてあらわす

りきもとまひ

ゆめ

田 お士

あふるまほんとまへるよまほん

もみ

まほんとまへるよまほん

ゆめ

田 お士

景

特

吉田 事事如意

國立公文書館
National Archives of Japan

伊豆守
伊豆守

善者

伊豆守

金子正流
金子正流

善利

伊豆守

善久

伊豆守

善子

伊豆守

正年

伊豆守

善久

伊豆守

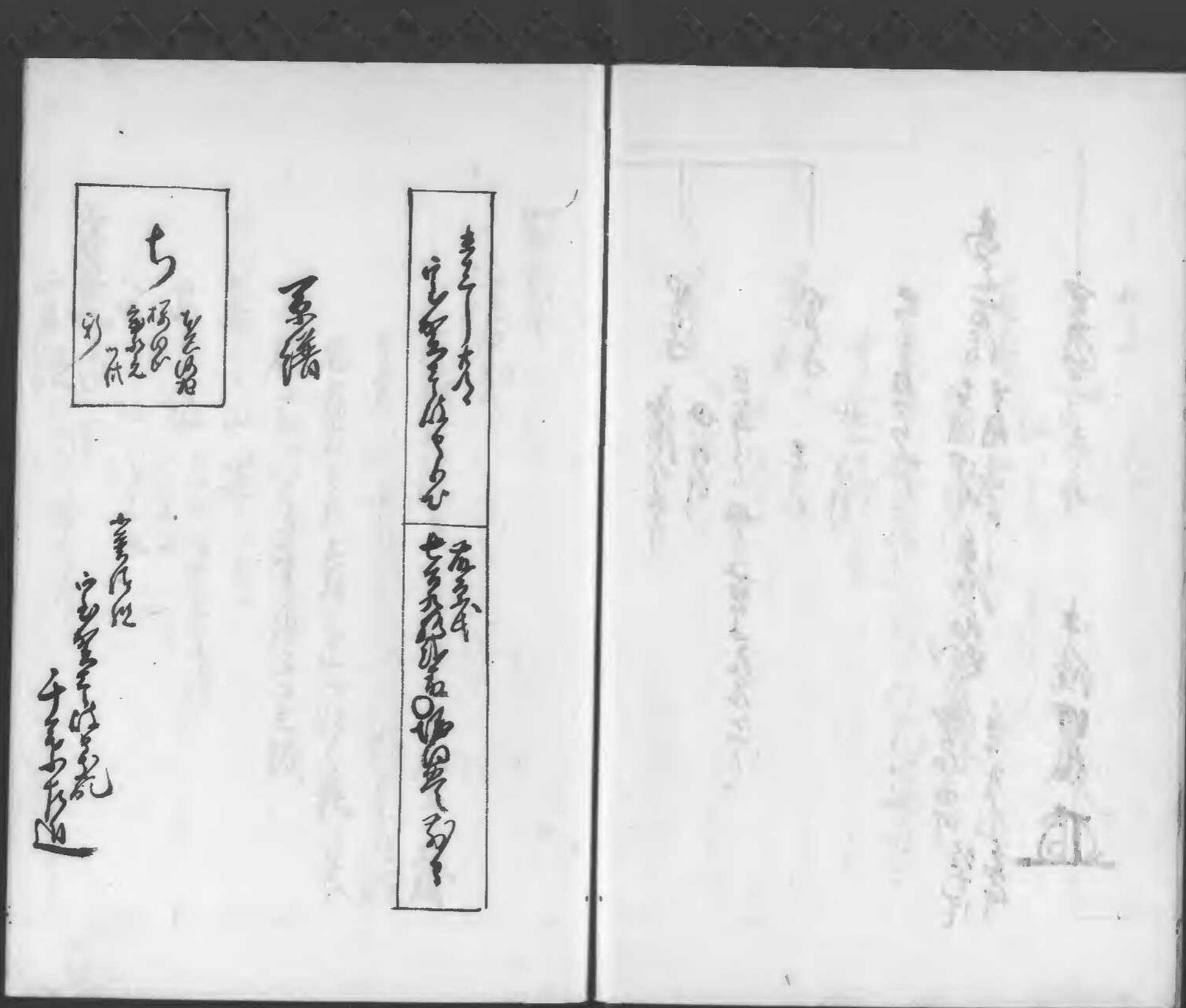
善久

伊豆守

高木正義
高木正義

善利

伊豆守



卷之四

卷之三

左麻冠行之 王晉平公八年左麻
右衛軍行之右衛將軍司馬懿

卷之三

あひ山 唐進破遠寺の傳
八重石塔

卷之三

卷之三

卷之三

金主義

吉宗

源氏

元

西院家主吉宗

源氏

元

吉宗

季政

母

季政

主義の世事の事務を了め
至急に
り出でれ
是
候爲めに

文思

辰

主義の事務を了め
此の間

之處に主義の事務を了め
去る所

主義の事務を了め
之處に主義の事務を了め

主義の事務を了め
之處に主義の事務を了め

主義の事務を了め
之處に主義の事務を了め

支那事務課事務官別

手取

母女

古木女

高木女手取の印紙は三月
新規修理費

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

手取

母女

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

手取

母女

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

支那事務課事務官別

卷之三

高麗
高麗
高麗

詩中子美之句也。其後人所傳，多失真義。

卷之三

王右軍書

二年正月廿二日
王氏存於西廬

卷之三

自非其子也。故曰：「知子莫若父。」

卷之三

也

主母の御多幸
お子の御多幸
お嬢の御多幸

卷之三
壬午年正月廿九日晴
此書卷之三爲卷之三
壬午年正月廿九日晴
此書卷之三爲卷之三

也
也
也
也

也
也

也

高
高
高
高

壬午年正月廿九日晴



原代
手稿

是年秋至二年春後臣於伊
佐木高齋處。高齋出於瘦翁
忠正公之門也。
忠正公之善畫
多得於高齋已。

忠正

四

忠正

忠正

忠正

書
卷之三

通鑑

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

の間で、その間は又人情、地主の善惡
の如き。
而して此の間は、之を以て、其の後、
五年の年月をもあつて、まだ其の事
實の如きを知らぬ。
夫そりぞれの如きを、其の如きに付
する。

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

りをうそうそとおもひながら、口はあくびをこね
て、まことに寝ねてゐる。」

卷之三

卷一

10

卷一
精

卷之三

李成蹊與孫

卷之三

自古以來士人之傳記多失其真
事者何也。不識以爲傳者與史
同之乎。夫傳者著其事而忘其言
之文也。

文淵閣四庫全書之藏書上卷

卷之三

白居易集

ノ九月の事は、主に和歌の言葉を用ひ
て、其の意を傳へる。
又、その中には、和歌の言葉を用ひ
て、其の意を傳へる。

時序

五度

夏

秋の意を傳へる。

冬

春の意を傳へる。

春の意を傳へる。

西暦十二月八日付の御手本の年号を

嘉慶九年九月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を

嘉慶九年九月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を
西暦十二月八日付の御手本の年号を

母 おおきなまめのうさか
母 おおきなまめのうさか

母 四ツ目

母 おおきなまめのうさか

母

四

おおきなまめのうさか

母

母

おおきなまめのうさか

母 おおきなまめのうさか
母 おおきなまめのうさか

宝曆二年三月廿日
入京の事無く自詠を失ふ
所

母 おおきなまめのうさか

母 おおきなまめのうさか

母 おおきなまめのうさか

母 おおきなまめのうさか

母 おおきなまめのうさか

母

の御年を以てお日付を年
月日と九十九歳の御年

慶祝御年御年御年

御年御年御年御年御年

御年御年御年御年御年

御年御年御年御年御年

御年御年御年

支

御年御年御年

日

母 義理の事は御年
吉 おめでたし御年
義父 おめでたし御年
義母 おめでたし御年

おめでたし御年
おめでたし御年
おめでたし御年
おめでたし御年

御年

支

母 おめでたし御年

國立公文書館
National Archives of Japan

卷之三

卷之三

此卷之末
予有感於
世間事
不外乎
名利財物
而人多
不知其
所以為
愚也

